

中国語を母語とする日本語上級学習者の 文末スタイルシフトに関する一考察

陳 新 · 川口 良

A Study on Sentence-Final Style Shift in a Chinese Learner of Advanced Japanese:

Chen Xin, Ryo Kawaguchi

文末文体有敬体和简体之分，根据谈话对方及场面的不同，使用或者转换相对应的文末文体。这一直是日语习得的难点之一。本稿作为阐明日语学习者的有关文末文体转换基准的基础研究，调查了中国学习者的文末文体的使用情况。以某个特定的高级日语学习者（以下为“CNNS”）为研究对象，设定了两个场面：一个是CNNS与日语母语者为对象的对方言语接触场面（以下为“对方言语场面”）；另一个是CNNS与非日语母语者（韩国日语学习者及西班牙日语学习者）为对象的第三言语接触场面（以下为“第三言语场面”）。分别比较考察了CNNS在「初次见面」谈话和「与友人」谈话中如何进行文末文体转换。

调查结果如下：首先，无论是「初次见面」谈话，还是「与友人」谈话，当谈话对象是日语母语者即对方言语场面，CNNS更倾向于往敬体转换。另外，当谈话对方是非日语母语者即第三言语场面，CNNS倾向于在有关涉及「听话者即对方领域」的谈话中往简体转换；与此相反，当谈话对方是日语母语者即对方言语场面，CNNS却在有关涉及「说话者即自身领域」的谈话中往简体转换。这些使用倾向反应了日语学习者的有关文体转换的「独特的使用规则」，那就是对非日语母语者优先考虑「心里距离的缩短」，而对日语母语者则优先考虑日语的待遇意义而多使用敬体表达。

1. はじめに

日本語には、丁寧体（デスマス体）と普通体（ダ体）という文末スタイルがある。相手や場面に応じて適切に各々を使い分けることは、メッセージ伝達よりも対人関係構築に関わる問題であり、社会文化能力、社会言語能力の一種とされている（三牧2007）。従来、日本語教育の中では、文末スタイルは学習者にとって習得しにくい項目とされていながら（宇佐美1995など）、学習者の運用面に関する実態を把握する研究の蓄積は少ない。特に、第三者言語接触場面¹、つまり、非母語話者同士が日本語を共通語としてコミュニケーションをするという接触場面における文末スタイルシフト²に関する研究は、まだ行われていない。

これまで「言語習得」が注目してきたのは、一般に、日本語母語話者との接触場面において産出される「日本語」であった。しかし、母語の異なる学習者同士が行うインターアクションは教室内外でも頻繁に行われており、学習者の日本語使用場面は母語話者との接触場面に限られるわけではない。だとすれば、「言語習得」を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は、看過できないのではないか。

そこで、本稿では、日本語母語話者との相手言語接触場面に加え、非

1 接触場面について、ファン（2006）は、「接触場面で実際に使われる言語（つまり、接触言語）と参加者の使用言語との関係によって、相手言語接触場面、第三者言語接触場面、共通言語接触場面の3つの場面に分類」（p.127）できると述べている。相手言語接触場面は、参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面である。第三者言語接触場面は、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面である。

2 文末スタイルシフトに関する研究分野では、研究者間で基本用語及び扱う研究対象が統一されていない。その中に、「待遇レベル」（三牧1993）、スピーチレベル（宇佐美1995、上仲2007、陳2003など）、「スピーチスタイル」（伊集院2004など）、「文末スタイル」（申2009）、「文末表現」（寺尾2010）などがあるが、本研究では、申（2009）に従い、丁寧体（デスマス体）と普通体（ダ体）などを一種の文末スタイルとして捉え、場面や相手に応じて基調として選択された文末スタイルを「基本的スタイル」、同一の談話における基本的スタイルからの一時的な文末スタイルの移行を「文末スタイルシフト」と呼ぶ。

母語話者同士の第三者言語接触場面を設定し、対人関係構築に大きく関わる文末スタイルシフトが日本語学習者によってどのように管理されているか、明らかにすることを目的とする。具体的には、中国語を母語とする特定の日本語学習者（以下CNNS）1名を対象とし、それぞれの会話場面に「対友人」場面と「初対面」場面を設定して、CNNSが会話相手や場面に応じてどのような文末スタイルを選択しているか、どのような状況で文末スタイルをシフトさせるか、把握することにする。

2. 先行研究と研究課題

文末スタイルシフトは生田・井出（1983）で取り上げられて以来、シフトが生起する要因及びその機能が明らかにされてきた。先駆的な論考である生田・井出（1983）は、「待遇レベルのシフト」の機能として「話の心的距離の調節」と「談話の展開」を挙げた。三牧（1993）は、テレビの対談番組を資料として談話分析した結果、文末スタイルシフトが談話の展開標識として機能する場合、（1）新しい話題への移行、（2）重要部分（結論・結末・意思・事実・論点など）の明示、強調、（3）注釈・補足・独話等の挿入という3点が主要な機能であることを明らかにした。また、宇佐美（1995）は、普通体にシフトする条件として（1）相手の「普通体の待遇レベル」に合わせる時、（2）何かを確認したり確認のための質疑をしたりする時、あるいはそれに答える時、ということを行っている。さらに、三牧（2000）は、丁寧体基調の談話にみる普通体へのシフトが「独話的発話」「過去の発話及び心情の直接引用」「現在の心情の直接表出」の場合に起きることを示し、これらの発話が「わきまえ」³を示しながら、丁寧体の堅苦しさを緩和し、話者間の距離感

3 三牧（2000）は、「同等の立場にある者は同等の基本的待遇レベルを設定する」（p.39）という言語行動のストラテジーを「わきまえ方式」としている。

を縮小させるという機能を果たしていると述べている (p.37)。陳文敏 (2003) は同年代の初対面日本語母語話者同士の会話を資料にし、「ダ体発話」へのシフトは、①相手の発話の一部を繰り返す時、②先取りをする時、③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時、⑦相手の発話内容に感嘆を示す時、⑧自分の心情を吐露する時に現れやすいことを論じた。このように、日本語母語話者によるスタイルシフトについては、その機能がより精緻化される方向で解明されつつあると言えよう。

一方、日本語学習者を対象とした研究は、比較的新しく、上仲 (2007)、寺尾 (2010) などがある。上仲 (2007) は、中国語を母語とする上級学習者 1 名を対象に調査した結果、学習者は短くて分かりやすく、使いやすい普通体を使うという、言葉の待遇面より機能面を重視する中間言語的な要素を明らかにしている。また、寺尾 (2010) は、中国語を母語とする初中級日本語学習者と日本語母語話者を対象として、「対教師」「対友人」の二つの会話場面について、文末スタイル運用の実態を縦断的に記述している。その結果、母語話者は場面に応じて文末スタイルをシフトさせているのに対し、学習者は (1) 引用節や従属節など、節を示すマーカーとして普通体を使用する、(2) 否定文では普通体を優先するという、学習者の文末スタイルシフトの言語内的要因を指摘し、「学習者が独自の言語内的ルールを創り出している」(p.139) と述べている。

これらの文末スタイルシフトに関する研究は、母語場面及び日本語母語話者と非母語話者との接触場면을扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者言語接触場面にはまだ言及されていない。そこで、本稿では、日本語母語話者との相手言語接触場面及び非母語話者同士の第三者言語接触場面という二つの場면을扱うこととし、研究課題を以下の 2 点に設

定して考察を進める。

- ①相手言語接触場面と第三者言語接触場面における「対友人」会話では、CNNSの文末スタイルはどのような選択基準によってなされるのか。
- ②相手言語接触場面と第三者言語接触場面における「初対面」会話では、CNNSの文末スタイルはどのような選択基準によってなされるのか。

3. 調査概要

3.1 調査対象及び調査方法

文末スタイルの管理プロセスをより深く質的に掘り下げて分析し観察するには、ケーススタディーが有効であると考え、本稿では、中国語を母語とする1名の日本語上級学習者⁴CNNSを中心として、相手言語接触場面（以下「相手場面」）と第三者言語接触場面（以下「第三者場面」）におけるCNNSの文末スタイルシフトを把握する。そのため、CNNSと日本語母語話者（以下NS）、CNNSと韓国語母語話者（以下KNNS）及びスペイン語母語話者（以下SNNS）との会話を収録した。それぞれ「対友人」会話と「初対面」会話に分け、話題は自由で日常生活で行われる会話と同じような世間話でよいと伝え、1組15～20分間ずつの会話を録音した。会話の収録が全て終了した後、フォローアップインタビューを行った。表1にインフォーマント情報を、表2に会話情報を示す。

4 調査対象CNNSと会話相手の日本語能力は滞日期間、学習歴、日本語能力試験のレベルによって判定した。上級と判断したのは、陳文敏（2004）に従い、(A) 来日して2年以上であり、(B) 日本語学習時間数が800時間以上であること、(C) 日常生活やゼミで自由に日本語を使っていること、の3点による。

中国語を母語とする日本語上級学習者の
文末スタイルシフトに関する一考察

表1 インフォーマント情報

参加者	日本語能力	CNNSとの関係	出身地	母語	性別	年齢	滞日期間	日本語学習歴
CNNS	上級	—	中国	中国語	女	25	2年7ヶ月	6年6ヶ月
KNNS	上級	友人関係	韓国	韓国語	女	27	4年	6年6ヶ月
SNNS	中上級	初対面	スペイン	スペイン語	男	28	8ヶ月	2年6ヶ月
NS1	母語話者	友人関係	群馬県	日本語	女	23	—	—
NS2	母語話者	初対面	新潟県	日本語	女	22	—	—

表2 会話情報

人間関係	相手言語接触場面	第三者言語接触場面
「対友人」 (親-親)	「CNNS-NS1」場面 (中国語母語話者-日本語母語話者)	「CNNS-KNNS」場面 (中国語母語話者-韓国語母語話者)
「初対面」 (疎-疎)	「CNNS-NS2」場面 (中国語母語話者-日本語母語話者)	「CNNS-SNNS」場面 (中国語母語話者-スペイン語母語話者)

このようにして得られた4つの場面の会話データをすべて「基本的文字化の原則BTSJ (改訂版)」(宇佐美2006)に従って文字化した。

本稿では伊集院(2004)を参考に、文末スタイルを大きく丁寧体(P)、普通体(N)、中途終了型発話(NM)の3つの種類に分けることにする。丁寧体(P)は、言い切りの「デス・マス」体及び終助詞と接続助詞の付く「デス・マス」体である。普通体(N)は、言い切りの「ダ」体及び終助詞と接続助詞の付く「ダ」体である。中途終了型発話(NM)とは、述部まで言い切られていないにもかかわらず、意図した情報の伝達を終了している発話を表し、普通体、丁寧体のどちらにも属さないものとして扱う。

また、林（2008）の「会話のストラテジーの中で、話者交替に最も強く結び付いているのが「あいづち」である」（p.17）という指摘に基づき、1 発話を成す「あいづち」を分析項目にすることにした。日本語記述文法研究会編（2009）に示されたあいづち表現の待遇の意味に従い、「はい、ええ、いいえ、いえ」を丁寧体（P）、「うん、ああ、まあ、ううん、いや」を普通体（N）として扱う。以上の基準に基づき、発話ごとに文末スタイルをコーディングして集計した。

3.2調査時期

2010年10月17日、20日、11月2日、4日

4. 調査結果及び考察

4.1基本的スタイルの選択および選択基準

まず、「対友人」会話による、「CNNS-NS1」場面（相手場面）と「CNNS-KNNS」場面（第三者場面）におけるCNNSの文末スタイルを、表3と図1に示す。

表3 「対友人」会話におけるCNNSの文末スタイル（発話数（%））

	丁寧体	普通体	中途終了型	総数
「CNNS-NS1」場面	21 (17.4%)	79 (65.2%)	21 (17.4%)	121 (100.0%)
「CNNS-KNNS」場面	0 (0.0%)	95 (94.1%)	6 (5.9%)	101 (100.0%)

中国語を母語とする日本語上級学習者の
文末スタイルシフトに関する一考察

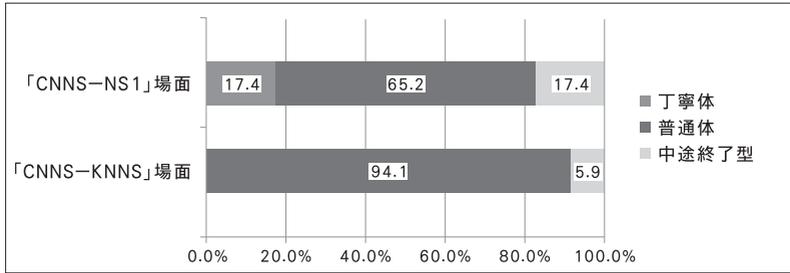


図1 「対友人」会話におけるCNNSの文末スタイルの出現率

表3、図1を見ると、「対友人」会話では、「CNNS-NS1」場面であれ、「CNNS-KNNS」場面であれ、CNNSの最も出現率の高い文末スタイルは普通体で、前者は65.2%（79話）、後者は94.1%（95話）を占めている。つまり、対友人の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNNSは基本的スタイルを普通体基調に設定していることが分かる。

次に、「初対面」会話による、「CNNS-NS2」場面と「CNNS-SNNS」場面におけるCNNSの文末スタイルを、表4と図2に示す。

表4 「初対面」会話におけるCNNSの文末スタイル（発話数 (%)）

	丁寧体	普通体	中途終了型	総数
「CNNS-NS2」場面	123 (60.0%)	53 (25.9%)	29 (14.1%)	205 (100.0%)
「CNNS-SNNS」場面	131 (54.1%)	80 (33.1%)	31 (12.8%)	242 (100.0%)

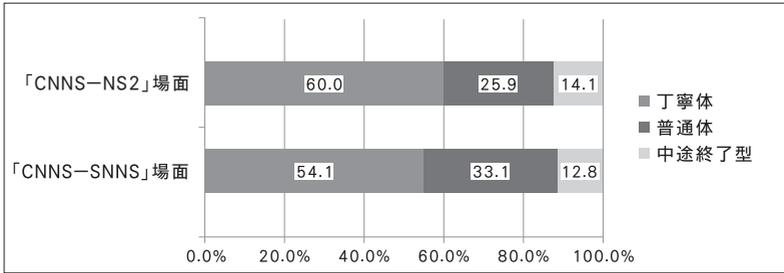


図2 「初対面」会話におけるCNNSの文末スタイルの出現率

表4、図2を見ると、「初対面」会話では、「CNNS-NS2」場面であれ、「CNNS-SNNS」場面であれ、CNNSの最も出現率の高い文末スタイルは丁寧体で、前者は60.0%（123話）、後者は54.1%（131話）を占めている。つまり、初対面の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNNSは基本的スタイルを丁寧体基調に設定していることが分かる。

以上の結果から、CNNSは、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、教科書で学んだ「日本語のルール」に従って、「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話では普通体、「初対面」会話では丁寧体を基本的スタイルとして選択していることが理解される。この基本的スタイルの選択基準について、CNNSはフォローアップインタビューでも、「相手が日本人かどうかにかかわらず、友人関係なら普通体を使うし、初対面なら丁寧体を使うべきだと思う」と語っている。

しかしながら、CNNSの基本的スタイルには相手が日本語母語話者か非母語話者かによる差は見られないものの、文末スタイルシフトには差が見られた。表3、図1を見ると、「対友人」の場合、「CNNS-NS1」場面におけるCNNSの丁寧体発話は21話で、総発話数の17.4%を占めているのに対して、「CNNS-KNNS」場面におけるCNNSの丁寧体発話は見られず、丁寧体へのシフトは起きていないことが分かる。「対友人」

の場合、CNNSは、相手場面の方が第三者場面より丁寧体へシフトする傾向が強いと言えよう。以下は、「対友人」会話の「CNNS-NS1」場面における発話例で、番号は発話の通し番号である。それまで普通体で話していたCNNSが、51で「NS1（姓）は夏休みにどこか旅行が行きます？」と丁寧体にシフトしていることが分かる。

49-1 CNNS：帰国中は、あのう、何も…、友達はみんな仕事、仕事、（/）

50 NS1：うんうん。 (N)

49-2 CNNS：がある、あるから、私、あのう、うちでテレビを見たり、
ゴロゴロ、ずっと、ゴロゴロ（笑いながら）していた。 (N)

→51 CNNS：NS1（姓）は夏休みにどこか旅行が行きます？ (P)

52 NS1：旅行は行ってなくて。 (NM)

53 CNNS：うんうん。 (N)

一方、「初対面」の場合、「CNNS-NS2」場面におけるCNNSの普通体発話は25.9%（53話）であるのに対して、「CNNS-SNNS」場面におけるCNNSの普通体発話は33.1%（80話）を占めている。「初対面」の場合、CNNSは、第三者場面の方が相手場面より普通体へシフトする傾向が大きいことが窺える。以下は、「初対面」会話の「CNNS-SNNS」場面における発話例である。

284 SNNS：あのう、大学、大学院生として、たぶん法律が変わるんじゃないでしょうか。 (P)

285 CNNS：いや、院生、なんか、ビザに関係がありますけど。 (P)

286 SNNS：そのビザは、その資格のところは、あのう、留学生が書いてあるんですか？また大学院生。 (P)

→287 CNNS: 留学生? (N)

288 SNNS: はい、留学生が書いてありますか?、その外国人登録証。
(P)

289 CNNS: 留学生です。 (P)

285 「いや、院生、なんか、ビザに関係がありますけど」までは丁寧体で話していたCNNSが、287で「留学生?」と普通体にシフトしている。

以上のことから、CNNSは、相手が日本語母語話者である相手場面においては、「対友人」の場合も「初対面」の場合も、丁寧体を用いようとする傾向が窺える。そこには、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとするCNNSの意識が推測される。特に、相手が自分と同じ非母語話者である場合の「対友人」会話には丁寧体へのシフトが全く見られなかったことから、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場面においては、別のルールが機能しているのかもしれない。それは、相手が親しい友人であれ、初対面の人物であれ、「日本語母語話者には丁寧に話さなければならない」という言語外的要因としての「学習者独自のルール」である。前述したように、CNNSはフォローアップインタビューでも、「相手が日本人かどうかにかかわらず、友人関係なら普通体を使うし、初対面なら丁寧体を使うべきだと思う」と語っていることから、その言語外的要因は学習者の潜在意識の中に存在していると考えられる。

4.2 「対友人」会話における文末スタイルシフトの生起する要因

では、これらのCNNSによるシフトは、どのような状況で、どのような要因によって生起するのだろうか。まず、「対友人」会話におけるCNNSの文末スタイルシフトが生起する状況及びその要因について分析

する。

「対友人」の場合、CNNSの丁寧体へのシフトは相手が日本語母語話者である「CNNS-NS1」場面のみで起こり、21話見られた。この21話は、発話機能の観点から「あいづち」「フィラー⁵」「情報要求」の3つに分類された。表5及び図3はその結果を示したものである。

表5 「対友人」会話におけるCNNSの丁寧体へのシフト (発話数 (%))

	あいづち	フィラー	情報要求	合計
「CNNS-NS1」場面	17 (81.0)	2 (9.5)	2 (9.5)	21 (100.0)

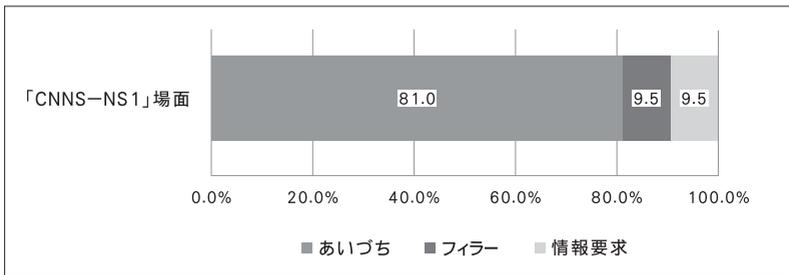


図3 「対友人」会話におけるCNNSの丁寧体へのシフト

丁寧体へシフトした文21話のうち、「あいづち」をうつ時が81.0% (17話)で、全体の8割を占めている。以下に発話例を示す。

- 11-1 NS1 : で、そうしたら、その後は、 (/)
- 12 CNNS : はい。 (P)
- 11-2 NS1 : 例えば、 (/)
- 13 CNNS : はい。 (P)

⁵ 「フィラー」とは、聞き手が話し手に対して送る短いメッセージやサインのことで、話者交替とは見なされないものを指す。

- 11-3 NS1: あのう、バイトをやめる時だね。 (N)
→14 CNNS: はい。 (P)
15 NS1: どのぐらい前、“一ヶ月前に言って” って言われる? (N)

CNNSは12、13、14で「はい」というあいづちを3回用いている。このように、「あいづち」による丁寧体へのシフト17話は、すべて「はい」によるものであった。

次に、「フィラー」を表すための2話は、以下のようなものである。

- 31 NS1: 11月から、行かなくてもいい。 (N)
32 CNNS: ああ↓、なるほど。 (NM)
33 NS1: で、できるんじゃないかと思うんだけど。 (N)
→34 CNNS: そうですね。 (P)
35-1 CNNS: なんか10月、10月に、あのう、日本語学会 (/)
36 NS1: うんうん。 (N)
35-2 CNNS: のなになにがあって、たぶん…。 (NM)

CNNSは34「そうですね」というフィラーを用いて丁寧体へシフトしている。もう1話のフィラーも同様に「そうですね」が用いられていた。

親しい友人に、フィラーやあいづちをうつ時に丁寧体へシフトすることには違和感があり、この言語行動から、CNNSは、相手に応じて「そうだね」と「そうですね」及び「うん」と「はい」を使い分けるという「日本語のルール」が習得できていないと考えられる。しかし、第三者場面である「CNNS-KNNS」場面の「対友人」会話を見ると、CNNSがフィラーとあいづちをうつ時には、以下に示すように、すべて「そうだね」「うん」が用いられているのである。

- 28 KNNS: こっちが長いけど、そっちも長いよね。 (N)
- 29 CNNS: ね、〈笑い〉、長いよね。 (N)
- 30 CNNS: うん、そっか、そっか。 (N)
- 31 CNNS: そうだね。 (N)
- 32 CNNS: 長いよね。 (N)
-
- 1-1KNNS: クリスマスね、 (ノ)
- 2 CNNS: うん。 (N)
- 1-2KNNS: 私さ、最初は、 (ノ)
- 3 CNNS: うん。 (N)
- 1-3CNNS: こう、休みを取って、こう、どこかへ行こうかなと思ったの。 (N)

CNNSは、「そうですね」と「そうだね」、「はい」と「うん」を相手に応じて使い分けられないのでなく、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には待遇的意味を重視して丁寧体を用いているのではないか。情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられるフィラーやあいづちの場合の丁寧体へのシフトが90.5%と、全体の9割を占めていたことから、日本語母語話者に対するこのような意識はCNNSの潜在意識にあるものと考えられ、CNNS自身も気づいていない可能性が示唆される。

最後に、「情報要求」の場合の丁寧体へのシフトが2話、見られた。以下に例を示す。

- 15 NS1: どのぐらい前、“一カ月前に言って” って言われる?。 (N)
- 16 CNNS: なんか、そこまでは……。 (NM)

→17 CNNS: 普通は一ヶ月ですか?。(P)

18 NS1: うんうん。(N)

CNNSは、NS1の15「どのぐらい前、“一ヶ月前に言って”って言われる?」という発話に対し、16「なんか、そこまでは・・・。」と言いき、ここでは「言われていない」が省略されている。続いて、17「普通は一ヶ月ですか?」という質問文によって、丁寧体へシフトしている。

質問文による「情報要求」は、聞き手目当ての行為、つまり、相手に向ける行為である。メイナード(2004)は、正式に相手に向ける発話においてスタイルシフトが起こることを論じているが、CNNSは、質問する時、つまり、相手から情報を引き出そうとする時に強く相手を意識して、丁寧体へシフトしたのではないか。

以上のことから、日本語母語話者の相手場面における「対友人」会話では、「はい」というあいづち、「そうですね」というフィラーによる丁寧体へのシフトがほとんどであり、さらに、相手に直接情報要求する「質問文」で起きていることが明らかになった。

4.3 「初対面」会話における文末スタイルシフトの生起する要因

次に、「初対面」会話におけるCNNSの文末スタイルシフトが生起する状況及びその要因について分析する。

本稿では、宇佐美(1995)、三牧(1993、2000)、陳文敏(2003)が挙げた普通体へシフトしやすい状況を参考にし、「初対面」会話におけるCNNSの普通体へのシフトを、「情報の受信を示す時」「情報の整理を行う時」「感情の表出を行う時」「あいづちをうつ時」の4つに分類することにした。そのようにして分類した結果を表6、図4に示す。「あいづちをうつ時」のあいづちは、「うん」「ああ」「まあ」の3語が用いられ

ていた。

表6 「初対面」会話におけるCNNSの普通体へのシフト (発話数 (%))

	情報の受信を示す時	情報の整理を表す時	感情の表出を行う時	あいづちをうつ時	合計
「CNNS-NS2」場面	7 (13.2)	24 (45.3)	9 (17.0)	13 (24.5)	53 (100.0)
「CNNS-SNNS」場面	26 (32.5)	13 (16.3)	7 (8.7)	34 (42.5)	80 (100.0)

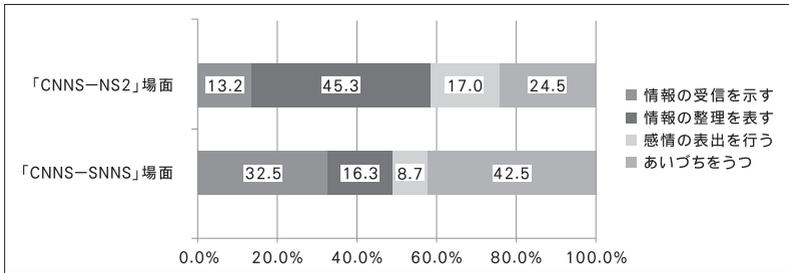


図4 「初対面」会話におけるCNNSの普通体へのシフト

両場面における普通体へのシフトを比較してみると、特に「情報の受信を示す時」と「情報の整理を表す時」の数値が逆転していることに気づく。「CNNS-NS2」場面では、「情報の受信を示す時」が13.2%（7話）であるのに対して、「CNNS-SNNS」場面では32.5%（26話）を占め、「CNNS-NS2」場面の2倍以上を示している。一方、「情報の整理を表す時」は、「CNNS-NS2」場面では45.3%（24話）を占めているのに対して、「CNNS-SNNS」場面では16.3%（13話）と、「CNNS-NS2」場面の3分の1程度しかシフトが起きていない。すなわち、CNNSは、相手が日本語母語話者である相手場面では「情報の整理を表す時」に多く普通体へシフトしているのに対して、相手が非母語話者である第三者場

面では反対に、「情報の受信を示す時」に普通体へシフトしている
 ある。この違いは何に起因するのだろうか。その要因を明らかにするた
 めに、以下、「情報の受信を示す時」と「情報の整理を表す時」の発話
 内容の分析を試みることにする。

4.4 「初対面」会話における「情報の受信を示す時」の普通体へのシフト まず、「情報の受信を示す時」の発話について観察する。

前述した宇佐美（1995）、三牧（1993、2000）、陳文敏（2003）が挙げ
 た普通体へシフトしやすい状況の「情報の受信を示す時」には、「①相
 手の発話の一部を繰り返す時」、「②先取りをする時」、「③相手の発話に
 対する補足をする時」、「④確認や確認のための質問をする時」、「⑤相
 手の質問に応答する時」がある。これらの先行研究に従って、ここでは
 「情報の受信を示す時」の発話を5つに分類することにした。その結果
 が表7と図5である。

表7 CNNSの「情報の受信を示す時」の普通体へのシフト（発話数）

	①相手の発話の一部を繰り返す時	②先取りをする時	③相手の発話に対する補足をする時	④確認や確認のための質問をする時	⑤相手の質問に応答する時	合計
「CNNS-NS2」場面	2	1	0	1	3	7
「CNNS-SNNS」場面	13	3	4	6	0	26

中国語を母語とする日本語上級学習者の
文末スタイルシフトに関する一考察

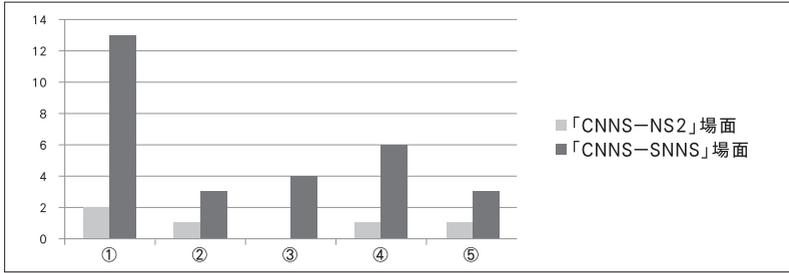


図5 CNNSの「情報の受信を示す時」の普通体へのシフト (発話数)

表7、図5を見ると、CNNSは、「CNNS-SNNS」場面において①「相手の発話の一部を繰り返す時」に13話が普通体へシフトし、最も多いことが分かる。「CNNS-SNNS」場面においては「情報の受信を示す時」の半分を①「相手の発話の一部を繰り返す時」が占めている。以下に発話例を示す（**【、】**は発話の重なりを示す）。

432 SNNS：あそこは果物は本当に安いですよ。 (P)

433 SNNS：あと、トマトも安い。 (N)

434 CNNS：そうですか。 (P)

435 SNNS：200、200円で、ええと、たぶん、ときどき (CNNS：うん)
トマト10個もらいます。 (P)

436 SNNS：大きい、小さいのではなくて **【**。 (NM)

→437 CNNS：**】 あ、ちい、大きい**。 (N)

CNNSは437「あ、ちい、大きい」で普通体へシフトしている。これはCNNSが436のSNSの発話「大きい、小さいのではなくて…」の一部を繰り返した発話である。こうした相手の発話の一部の繰り返しによるシフトについて、陳文敏(2003)は、話者間の距離感を縮小させ、話し

やすい雰囲気醸成できると指摘している。第三者場面では、このような「相手の発話の一部を繰り返す時」に普通体へシフトすることによって、CNNSは話者間の距離感を縮小させ、話しやすい雰囲気醸成していると言えよう。

次に多い状況が④「確認や確認のための質問をする時」で、6話がシフトしている。以下に発話例を示す。

- 117 CNNS：ええと、専門は何ですか。 (P)
118 SNNS：観光、観光産業という専門を受けて。 (NM)
→119 CNNS：はい、カンコウ? (N)
120 SNNS：観光、観光、観光地の観光。 (N)
121 CNNS：はい。 (P)

CNNSはSNNSの118「観光産業」の「カンコウ」が理解できなかったようで、119で「はい、カンコウ？」という、確認のための質問をして普通体へシフトしている。

宇佐美（1995）は、主要な話題の流れの途中でその内容をよりよく理解するために確認したり確認のために質問したりする時に普通体を使用することによって、発話を簡潔化して、会話のスムーズな流れを滞らせるのを最小限にとどめることができると指摘している。つまり、主要な話題の流れの途中で何かを確認する時に、効率を求めて普通体が用いられると考えられる。このような確認による普通体へのシフトは、「CNNS-NS2」場面では1話しか観察されなかった。相手が日本語母語話者である場合より、相手が非母語話である場合のほうが、待遇の意味より、発話を簡潔にすることに意識が傾いていると言えよう。

次に、CNNSの普通体へのシフトが4話観察された③「相手の発話に

対する補足をする時」の例を見てみよう。

- 263 SNNS : でも、普通のバイトは800円（ね）以上ですよ。 (P)
264 SNNS : もちろん物価はもうちょっと 【】。 (NM)
265 CNNS : 【】 埼玉は東京は900円、千円もありますよね。 (P)
267 SNNS : そうそう、あと、夜中のバイトは千円以上になりますね。 (P)
→268 CNNS : 時給アップ。 (N)
269 SNNS : そうですね。 (P)

CNNSは、アルバイトの時給に関する談話の中で、SNNSの267「夜中のバイトは千円以上になりますね」という発話に対して、268で「時給アップ」と補足する時に普通体へシフトしている。「相手の発話に対する補足をする時」の発話は、会話相手すなわち聞き手領域に関わるものであり、この状況で普通体へシフトすることによって、CNNSは相手に共感を示そうとして相手との心的距離の短縮を図っていると考えられる。このような状況による普通体へのシフトは、相手が非母語話者である「CNNS-SNNS」場面にしか観察されなかった。

最後に、②「先取りをする時」の発話例を以下に示す。

- 294 SNNS : 【】 でも、騙され、騙される可能性はちょっと…。 (NM)
295 CNNS : そう、たぶん心配、みんな心配しましたから。 (P)
296 SNNS : そうそう、心配して。 (NM)
297 CNNS : そうそう、心配して。 (NM)
298 SNNS : ちょっと、あのう、夜のバイト 【】。 (NM)
→299 CNNS : 【】 そうそう、やらないほうがいい。 (N)
300 SNNS : そうそう、そのほうがいいね。 (N)

SNNSが298「ちょっと、あのう、夜のバイト」と、まだ言い終わっていない部分を、CNNSは「やらないほうがいい」と予測し、299「そうそう、やらないほうがいい」と普通体の発話によって先取りして、SNNSの発話を完成させている。「先取り」の言語行動については、林(2008)が、会話における熱心さを伝え、会話相手との協力や連帯感を強めるという肯定的な側面があると論じている。これに従えば、先取りをする時に、普通体へシフトすることによって、話者間の心理的距離が短縮できると思われる。このような、CNNSの「先取り」による普通体へのシフトは、「CNNS-SNNS」場面で3話あるのに対して、「CNNS-NS2」場面では1話のみであった。

以上のような①②③④の発話内容から見れば、「情報の受信を示す時」は、会話の相手である聞き手に関わる発話、すなわち「聞き手領域」に関わる発話と考えられる。つまり、初対面の場合、「CNNS-SNNS」の第三者場面では、「聞き手領域」に関わる発話として「情報の受信を示す時」に普通体へシフトしやすいことが分かる。「聞き手領域」の発話に普通体が使われるのは、CNNSが「疎」の社会関係を意識して丁寧体を保ちながらも、相手を非母語話者であると認知して、「丁寧に話す」という待遇の意味に対する配慮が薄れ、「心的距離の短縮」を優先するためではないだろうか。これは、表6において「あいづちをうつ時」の普通体へのシフトが、「CNNS-NS2」場面は13話、出現しているのに対して、「CNNS-SNNS」場面は34話となって、第三者場面のほうが相手場面の3倍近く起きるにも現れていると言える。

一方、⑤「相手の質問に応答する時」は、普通体へのシフトが「CNNS-NS2」場面のみで3話、起きているのに対して、「CNNS-SNNS」場面では全く起きていない。以下に「CNNS-NS2」場面の発話例を示す。

- 108 CNNS: で、卒業して、日本へ留学に行きました。 (P)
- 109 NS2: ああ、なるほど、すごいお上手で…。 (NM)
- 110 CNNS: いいえ、まだまだです。 (P)
- 111 NS2: 本当ですか。 (P)
- 112 NS2: じゃ、何年間勉強されましたか? (P)
- 113-1 CNNS: 大学で4年間勉強して、日本に留学して、日本語学校で1年間かよって、日本に来て、今、2年間ぐらい、2年 (/)
- 114 NS2: それぐらいなんですね。 (P)
- 113-2 CNNS: 2年2月、2年2ヵ月ぐらい。 (N)
- 115 NS2: ああ、そうだったんですね。 (P)

CNNSはNS2の112「じゃ、何年間勉強されましたか?」という質問に応答する時に、113-1と113-2で普通体へシフトしている。その「…2年間ぐらい、2年、2年2月、2年2ヵ月ぐらい」という表現から、CNNSが考えながら応答の様子が窺える。これは、CNNSが、情報の伝達のほうに意識が集中していることを示している。このような状況で生起するシフトは、「CNNS-NS2」場面にしか観察されない。⑤「相手の質問に応答する時」は、①②③④と違って「聞き手領域」ではなく、「話し手自身の領域」である。この状況でCNNSが発話を普通体へシフトさせるのは、「心的距離の短縮」を優先させるのではなく、相手が母語話者であるという潜在意識が働いて情報伝達のほうに意識が傾くためではないだろうか。

4.5 「初対面」会話における「情報の整理を表す時」の普通体へのシフト
次に、「情報の整理を表す時」の発話について観察する。

宇佐美 (1995), 三牧 (1993, 2000), 陳文敏 (2003) が挙げた普通体

へシフトしやすい状況の「情報の整理を表す時」には、「⑥自己発話に対する補足をする時」、「⑦重要部分の明示、強調をする時」、「⑧独話的発話をする時」、「⑨新しい話題へ移行する時」の4つがある。これらの先行研究に従って、ここでは「情報の整理を表す時」の発話を4つに分類することにした。その結果が表8及び図6である。

表8 CNNNSの「情報の整理を表す時」の普通体へのシフト (発話数)

	⑥自己発話 に対する補 足をする時	⑦重要部分 の明示、強 調をする時	⑧独話的発 話をする時	⑨新しい話 題へ移行す る時	合 計
「CNNNS-NS2」場面	10	6	7	1	24
「CNNNS-SNNS」場面	4	3	3	3	13

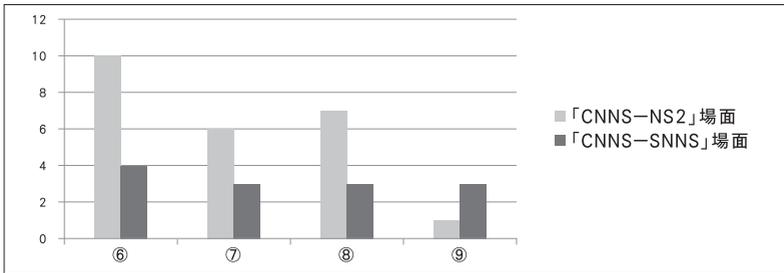


図6 CNNNSの「情報の整理を表す時」の普通体へのシフト (発話数)

表8、図6を見ると、CNNNSの普通体へのシフトは「CNNNS-NS2」場面において⑥「自己発話に対する補足をする時」が10話で、最も多いことが分かる。「CNNNS-NS2」場面においては「情報の整理を表す時」の半分近くを⑥「自己発話に対する補足をする時」が占めている。以下に発話例を示す。

- 130 NS2: 日本語は難しかったですか、勉強するには。 (P)
- 131 CNNS: そうですね。 (P)
- 132 CNNS: 難しいところは難しいですけど。 (P)
- 133-1 CNNS: まあ、なんか、今は聞くのは、なんか、まあまあ大丈夫
夫なんだけど、やっぱり自分の意見を表すのは、 (/)
- 134 NS2: ああ。 (N)
- 133-2 CNNS: なんか難しい感じ。 (N)

ここでCNNSは、NS2の130「日本語は難しかったですか、勉強するには。」という質問に対して、132で「難しいところは難しいですけど」と答えている。この自己発話に続いて、133-1と133-2で「聞くのは大丈夫だけど、自分の意見を表すのは難しい感じ」という具体的内容を補足するのに、普通体へシフトしている。三牧(1993)によると、このような普通体へのシフトは、「自己発話に対する補足」を示す談話展開標識の機能を果たしているという。つまり、「自己発話に対する補足」は、「話し手領域」の発話であることを示すために普通体が使われていると言える。

次にCNNSの普通体へのシフトが多いのが⑧「独話的発話をする時」で、7話、起きている。以下に発話例を示す。

- 83 NS2: で、こう思ったんですけど、バイトが忙しくなっちゃって行けなくなっちゃいました。 (P)
- 84 CNNS: そうですか。 (P)
- 85 NS2: はい。 (P)
- 86 CNNS: 今、まあ、三年生かな。 (N)
- 87-1 CNNS: 今、北京実習も、 (/)

88 NS2：はい。 (P)

87-2 CNNS：ありますよね。 (P)

CNNSは86「今、まあ、三年生かな」という独話的発話をする時に、普通体へシフトしている。三牧(1993)は、独話的発話をする時に普通体へシフトすることによって、当該の発話が話し手自身に向けられていることを明示する談話展開標識の機能を果たしていると指摘している。つまり、CNNSは、自分自身に向けた独話の場合に普通体へシフトしていると言える。

⑧「独話的発話をする時」とほぼ同数の6話が観察されたのが、⑦「重要部分の明示、強調をする時」である。以下に発話例を示す。

234 CNNS：日本では、なんか、旅行とか、あんまりしなかったんですけど、なんか、広島、夏休みに、広島へ行きました。(P)

235 NS2：広島、げんぱく？ (N)

236 CNNS：そうそう、そっち行きました。(P)

→237 CNNS：や、広島と言えば、なんか、いい、いいんだけど、なんか、わざわざ行く〈笑い〉価値がないと思う。 (N)

238 NS2：あ、なるほど〈笑い〉。(NM)

239 CNNS：あ、でも、“みやしま”がいいと思います。(P)

CNNSは234で「夏休みに広島へ行きました」という話題を取り上げ、続いて、237で「広島はいいんだけど、わざわざ行く価値がないと思う」という広島に対する評価を述べている。三牧(1993)は、このような重要部分の明示、強調によるシフトを、やはり談話展開標識の機能として指摘しているが、CNNSは、自身の「広島に対する評価」という重要部

分を普通体へシフトさせることによって、明示していると考えられる。

以上、⑥⑦⑧は、いずれも三牧（1993）が指摘する談話展開標識を示すシフトと言え、⑥⑦は話し手自身に関わる内容すなわち「話し手領域」に関する発話であり、⑧は独話的発話すなわち「話し手自身へ向けられた」発話である。初対面の場合、相手が日本語母語話者である相手場面では、CNNSは「話し手領域」の内容や「話し手自身へ向けられた」発話によって「情報の整理を表す時」に普通体へシフトする傾向があると言える。これは、日本語母語話者が相手である場合、「疎」の社会関係と待遇的意味に配慮する方向に意識が傾くために、自分自身のことや自分自身へ向けた発話を普通体へシフトさせて談話展開標識を明示することによって、「へりくだる」姿勢を見せているのではないだろうか。

一方、⑨「新しい話題へ移行する時」は、「CNNS-NS2」場面に1話、「CNNS-SNNS」場面に3話、普通体へのシフトが起り、「CNNS-SNNS」場面の方が多いたことが分かる。以下に発話例を示す。

429-1 SNNS：松原団地で、新しい、ええと、建設された“スーパー
の名前”ホームセンター、 (/)

430 CNNS：そうですね。 (P)

429-2 SNNS：素晴らしいですよ。 (P)

431 CNNS：安いですか？ (P)

432 SNNS：あそこに果物は本当に安いですよ。 (P)

(中略)

461 CNNS：ええ、今度ぜひ私行きます。 (P)

462 SNNS：はいはい、私は喜んでご案内します。 (P)

463 CNNS：いい情報をもらいました、〈笑い〉いい情報をもらいま
した。 (P)

- 464 SNNS : 私のバイトの所、そこにありますから。 (P)
- 465 CNNS : ああ、そうですか。 (P)
- 466 SNNS : だから、途中で寄りに行きます。 (P)
- 467 CNNS : ええ。 (P)
- 468 SNNS : 買得品はいっぱいありますから。 (P)
- 469 CNNS : 埼玉県は物価が、まあ、安いね、普通。 (N)
- 470 SNNS : 田舎だから。 (NM)
- 471 CNNS : 田舎ですね。 (P)

この談話は、468までは「松原団地にあるスーパー」についての発話であるが、469「埼玉県は物価が、まあ、安いね、普通」という部分で、「埼玉県は物価が安い」という新しい話題へ移行している。この状況で普通体へシフトすることによって、新しい話題の開始を明確に示している。

三牧(1993)は、新しい話題への移行によるシフトは談話展開標識の機能を果たしていると述べる。この「新しい話題への移行」による普通体へのシフトは、「CNNS-NS2」場面では1話、「CNNS-SNNS」場面では3話、観察された。つまり、「CNNS-SNNS」場面のほうが「CNNS-NS2」場面の3倍、シフトしやすいと言える。⑨「新しい話題へ移行する時」は、⑥⑦⑧と違って「話し手領域」の発話ではない。従って、「新しい話題へ移行する時」に普通体へシフトして談話展開標識を明示することによって、CNNSは、「CNNS-SNNS」場面では会話をスムーズに進め、心的距離を短縮しようとしていることが考えられる。つまり、新しい話題へ移行する時には、相手場面より第三者場面のほうが「心的距離の短縮」を優先するために普通体へのシフトが起きている可能性が指摘される。

5. まとめ及び今後の課題

本稿では、相手言語接触場面と第三者言語接触場面における「対友人」会話と「初対面」会話において、CNNSの文末スタイルがどのような選択基準によってシフトするか、分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、両場面ともに、CNNSは教科書で学んだ「日本語のルール」に従って「親疎」という相手との人間関係を考慮し、「対友人」会話には普通体を、「初対面」会話には丁寧体を基調として選択する。しかし、第三者場面の「対友人」会話では丁寧体へのシフトが全く見られなかったのに対して、相手場面ではあいづちやフィラー、情報要求する際に丁寧体へのシフトが起きていた。従って、「対友人」であれ、「初対面」であれ、相手が日本語母語話者である相手場面では丁寧体へシフトしやすいと言えよう。

次に、「初対面」会話における普通体へのシフト要因を分析し、次の結果が得られた。CNNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話が普通体へシフトしやすく、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が普通体へシフトする傾向がある。これらのことからCNNSは、非母語話者には「心的距離の短縮」を優先するのに対して、日本語母語話者には待遇の意味に配慮して「へりくだる姿勢」を見せる可能性が示唆される。

以上の結果から、CNNSの文末スタイルシフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合にはより丁寧であろうとする「学習者独自のルール」が存在することが指摘されるだろう。

これまで、日本語母語話者との接触場面における学習者の日本語を「中間言語」と考えるのが一般的であり、話し相手が目標言語の母語話者か非母語話者かという言語外的要因については等閑視されてきたと言

える。文末スタイルシフトに関する本調査結果においては、非母語話者との第三者場面と日本語母語話者との相手場面では異なる「中間言語」の局面が窺えたことから、学習者の言語習得に、話し相手の母語が目標言語か否かという言語外的要因が及ぼす影響は決して小さくないと考える。

今回の実験では、被験者である非母語話者の属性を統一することができなかつたため、CNNSの文末スタイルシフトに他の要因が影響した可能性は否めない。今後は被験者の属性を統一し、データ数を増やすことによって、結果の信頼性を高めていきたいと思う。

<参考文献>

- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチ文末スタイルの使い分け－母語場面と接触場面の相違－」『社会言語科学』6（2），社会言語科学会，pp.12-26
- 井出詳子・生田少子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12（12），pp.77-84
- 上仲淳（2007）「中国語を母語とする上級学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』16，大阪大学言語文化学会，pp.141-154
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用－スピーチレベルシフト生起の条件と機能－」『学苑』662，昭和女子大学近代文学研究所，pp.27-42
- 宇佐美まゆみ（2006）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2005年2月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13，東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言

- 語運用を基盤とする言語情報学拠点」 pp.21-46
- 申媛善 (2009) 「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用－時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して－」 『日本語教育』 140, 日本語教育学会, pp.81-91
- 陳新 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する研究－相手言語接触場面と第三者言語接触場面との比較－」 平成23年度文教大学大学院言語文化研究科修士論文
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト－生起しやすい状況とその頻度をめぐって－」 『日本語科学』 14, 国書刊行会, pp.7-28
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触場面会話におけるスピーチレベル・シフト－日本語母語話者同士による会話との比較－」 『日本語教育論集』 20, 国立国語研究所, pp.18-33
- 寺尾綾 (2010) 「文末形式の運用とスタイル切り換え－日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから－」 『阪大日本語研究』 22, 大阪大学院文学研究科日本語講座, pp.113-142
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法7』, くろしお出版
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ：理論と実践』 研究社
- ファン, S.K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」 『日本語教育の新たな文脈－学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性－』, 独立行政法人国立国語研究所編, 株式会社アルク, pp.120-137
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開としての待遇レベル・シフト」 『大阪教育大学紀要第1部門』 42 (1), 大阪教育大学, pp.39-51,
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出－「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジー

として-」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, 大阪大学留学生センター, pp.37-53

三牧陽子 (2007) 「文体差と日本語教育」『日本語教育』134, 日本語教育学会, pp.58-67

泉子・K・メイナード (2004) 『談話言語学-日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究-』, くろしお出版

【本稿は、陳新の平成23年度修士論文「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する研究-相手言語接触場面と第三者言語接触場面との比較-」の一部を加筆修正したものである。】